



幼児の教育



家庭・保育所・幼稚園



2004



いつもの保育をパワーアップする、 リーズナブルなミニブックシリーズ！

最新刊

パワーアップ保育SERIES



10分でつくって60分あそべる カンタンぱわふるおもちゃ 1

田中世津子 著

牛乳パックや紙コップなど身近な素材を使った手づくりおもちゃの作り方集。やさしく短時間でつくれて、遊んで楽しいおもちゃの数々につくる工夫と遊び工夫がつまっています。

17cm×18cm 48頁 定価998円(税込)



10分でつくって60分あそべる カンタンぱわふるおもちゃ 2

田中世津子 著

簡単につくれて、遊んで楽しい手づくりおもちゃ作り方集の第2弾。ペットボトルやスチロールトレイ、ストローなどの身近な素材を使うなかで、考えて工夫するよろこびを味わえます。

17cm×18cm 48頁 定価998円(税込)



こことことばを育む ぱっかばか手遊び・指遊び・ハンカチ遊び

斎藤二三子 著

保育者や保護者がふれあいながら子どもの心と言葉を育てる、シンプルで楽しいオリジナル遊びを紹介。子どもの発達や季節、園行事に合わせてアレンジできるヒントもいっぱい！カバーに「マジカルハンカチ」の型紙つき。

17cm×18cm 48頁 定価998円(税込)



0・1・2歳児 赤ちゃんのスキンシップあそびとおもちゃ

木村実咲 著

園や家庭で赤ちゃんと楽しく遊ぶためのスキンシップ遊びとおもちゃ作りのアイデア集。難しく考えずに楽しみながら赤ちゃんの育ちを援助できるよう、ポイントと遊び方をシンプルに紹介。

17cm×18cm 48頁 定価998円(税込)

キンダーブックの フレーべる館

以下続刊

幼児の教育

第103巻 第7号



幼児の教育 目 次

第一〇三卷 第七号

© 2004
日本幼稚園協会

巻頭言 凜として一日々の積み重ねが育てる自信……………関口はつ江…（4）

特集〈耳〉

みみ

「きくこと」と「わかること」

田村久美子…（8）

「耳」をめぐって

吉川はる奈…（11）

言葉をつかむ

村石理恵子…（14）

気持ちをつかむ

山梨八重子…（18）

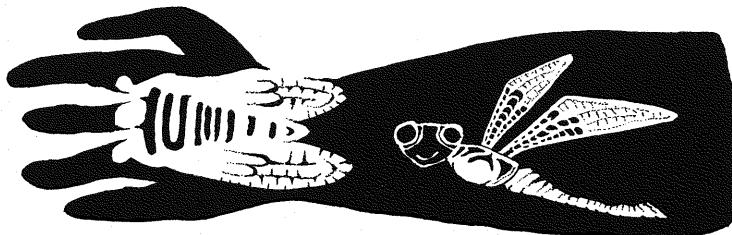
聴き取る力

吉村真理子…（22）

「遊び雑感」その六 水はともだち

戎 喜久恵…（29）

退職園長による子育て塾(4) 自分を表現できる」と



障碍をもつ幼児の保育(23) —この子と出会ったとき—

遊びが伝えてくれること 津守 真・津守 房江： (36)

乳幼児の「食」を考える(2) 小川 清実： (41)

子どもと出会う(8) ことばが発達する 岩田 純一： (46)

保育者として育つこと・育てるのこと 矢萩 恭子： (56)

はれ！ ときどき・・・その④ さとうひろこ： (63)

表紙絵／藤原ヒロコ

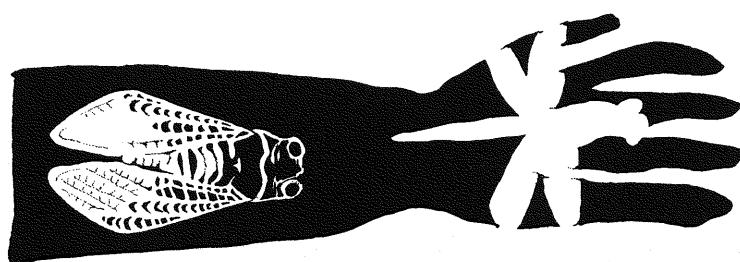
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「手づかみの夏」

編集委員／田代 和美・浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子・仲 明子

編集部／河合 聰子



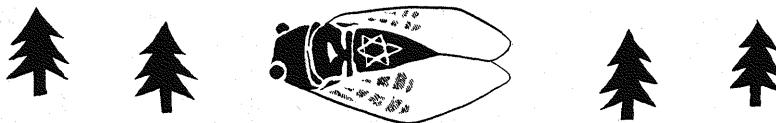
卷頭言

凛として

—日々の積み重ねが育てる自信—

関口はつ江

卒業式シーズンにある幼稚園の卒園式に出席する機会を得た。十人に満たない卒園児だったが、子どもたちが式場に入場するときから四十分ほど、多くの大人たちに囲まれながら、卒業証書を頂く、先生の話を聞く、歌を歌う、どの場面でも一人一人が堂々とよい姿勢で振る舞う姿に魅せられてしまった。幼さの中にも「凛として」新しいことに向かっている自信が伝わってきた。その子どもたちは式の後、保育室で無邪気に賑やかに積み木遊びをしていて、喧嘩をして、先生に「お友達が嫌がることはしないのよ」と最後まで強くたしなめられていた。どのような時でも大切なことは一貫して身につけさせようとした



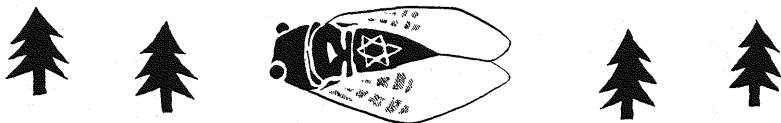
て いる 「 凜とした 」 保育者 の心 を垣間見た 思いだつた。

卒園式の練習は一回だけと伺い、日頃の生活の中でどのような場面にも通用するよい振る舞い方の基本と、常に対象に集中する態度が作られてきたことが、この晴れの日でも極端に緊張したり、はしゃいだり、不安になることもなく、いつもの自分で判断して行動すればよいとの安定感でいたられたように思えた。そして、これからも、どこでも。

そこで、その一ヶ月ほど前、小学校の授業参観をした時の驚きを思い出した。学校生活も一年が過ぎようという時期、国語の授業のこと、子ども同士でふざける子、机の上が乱雑な子、姿勢の悪い子、どのような行動に対しても先生からの注意はない。授業では順番に教科書の音読をしたが、よい読み方についての手本や助言はない。それぞれの子どもなりのやり方だったが「みんなわかりやすくはつきりと読みましたか」「はーい」という先生と子どもたちの掛け合いで終わつた。教室の後に貼つてある子どもたちの絵日記の文字が違つても訂正はなく、小さな統字で先生の感想が書き込まれていた。授業時間が終わらないうちに参観にきていた大学生とふざける子もいたりしながら何となく授業は終つた。

適切な行動や思考の仕方への手がかりが明確に与えられず、集中力が感じられない教室の状態に、学校で学び始めたばかりの一年生に必要な指導は何なのかを考えさせられてしまつた。

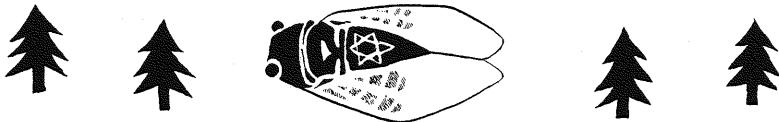




近年、我が国では小学生から大学生に至るまでの学力低下が教育の大きな問題の一つとなっている。学ぶ主体としての子どもの内からの要求を直視して大人はきちんと応えるかどうかを真剣に問い合わせなければならないと思う。

『人間は教育されなければならぬ唯一の被造物である』（カント）という人間像は特殊近代社会の前提である、「教える—学ぶ」の関係は一方向ではない、子どもたちは单一の価値を押しつけられてはならないなど、教育の受け手としての子ども像から生活の主体者としての子ども像への転換、子どもの自発性の尊重への動向の中で、「導く—育つに任せる」「統制—自由」「基本—応用」の問題はどうしても子どもの自主の方向への原則論へと向う。しかし、教育・保育の場の子どもたちの姿を見ると、これはAかBかの対立ではなく、もつと子どもの実際の姿に即して、何が子どもを育てるのかを見極めて対応すべきであることを痛感する。

「新しい学力観が言われてから、現場がやや行き過ぎの感がある。『知識を与えるのではなく、子どもに考えさせる』『子どもが意欲を損なわないように、発言に否定的なことは言わない』……『詰め込み』『教え込み』の反動として知識を教えるということ自体、もはや古い（悪い）ことであるような風潮が広まってしまった。……この十年ほどの変化で言えば『きちんと教えない授業』が目に付くようになつた。子どもたちが明らかに誤ったことを言つても『発言意欲をそいでしまうから』ということで正すことをしない。……多



くの子どもたちは授業だけでは一体何を学んだのかわからないまま時間だけが過ぎていく。新しいことがわかつたという喜びも味わえなければ、得た知識を使ってさらに発展的な活動に至るということもない」（注）との授業に関する反省は、幼児教育の場についても当てはまることがあるであろう。

例えば、保育についての話し合いで「子どもがトイレの後で手を洗わないとしても、もしこれから泥んこ遊びをしようと思っているのなら、本人が考えてそうしているのだから注意しなくてもよいのでは」というような意見があつた。そうであろうか。次に何をするにしても、やらなければならないと知っていることを面倒がらずにきちんとやつているとき、子どもは自分に自信と誇りをもつことができるのではないだろうか。そうするように教え、支えることが子どもの高い精神性を育てることになるのではないだろうか。

「よく教育することはよく生活させることである」とは羽仁もと子のことばだが、「よい生活を」構成し教えるのは大人の役割であり、様々な揺らぎの中にある子どもを支えるには、保育者に毅然とした生活態度が求められる。幼児期に当たり前のことが正しく身につくまで教える（方法はいろいろあるが）ことを躊躇することは、先の学力低下と同じ問題につながるのではないかと思うのである。

（十文字学園女子大学）

（注）市川伸一『学力低下論争』ちくま新書 二〇〇一 二〇九一一〇頁

特集 〈耳〉

み

み

田 村 久 美 子

耳というとまず思い浮かぶのは♪の印のこと、日本では「へ音記号」という。ト音記号というのは、♪この印で、小学校の音楽の時間に教えられてぐるぐると書きはじめて、親しんでいる人が多いと思う。♪こちらの記号は楽器によって使う人もあるが、あまり親しみはないかもしない。ピアノを弾く人は左手の記号という感じで親

しんでいるだろう。この記号を私は子どもたちに教える時「おみみのかたち」「おみみの記号」ということにしている。そんなことをしているうちに私自身もこの記号を書く時はこの記号で表される音域の音が聞こえるようになつていて。

ある時、当時北海道の大学に通っていた息子があり。ピアノを弾く人は左手の記号といふ感じで親

けどさ、あれ、下から二番目がドだよね。だから次の線はレでいいんだよね、それが変なんだ、合はないんだ」。

彼は合奏しているらしい。色々な楽器を使う時、**図**の記号を使うことがある。彼はこの記号をうつかり読みちがえていたのだ。「あ、わかった。ガチャン！」。私はしばらく笑いがとまらなかつた。なかなか電話などかけてこない彼が「もしもしみみだけど」なのである。

それからもずっと私は「このかたちおみみに似てるでしょ」とピアノのレッスンのとき子どもたちに聞く、「うーん」という可愛い答がかえってくるたびに、あの電話がよみがえつてくる。楽譜の途中でこの記号がでてきたりすると「ほらおみみになるのよ」「おみみのところを気をつけてね」と毎日のように言つている。

みみということばは音が美しい、ドミソといふ

基本的な和音の中心にいて、和音のひびきを柔らかくしているミの音という感覺が私の中にはあるが、みみと発音するとたのしいなつかしい気分になる。それは昔話『ききみみずきん』(岩波書店)を思うかららしい。「木下順二 文・初山滋絵」で美しい絵本がある。初山滋の絵が印象的で、ずきんをかぶると小鳥の声からお話を聞こえるというなんともたのしいお話だ。幼い頃この話を知つてから、私はこのずきんをいつでも持つている気になつてゐる。庭先で遊んでいるスズメはなかよくしたりにぎやかにおしゃべりしているし、木の上ではめじろのつがいがよりそつて小声で話しているのに、かけすが、大声でおどかしたりしている。鳥ばかりではない。我が家の小さな水槽の中のカメもメダカも、なかなかにぎやかに話している。

スリランカに行つた時のことである。夜明け前

のまだ暗い空から、カンカラカーン、カンカラカーンと歌いはじめる鳥がいて、それに応えて、グググおはようという声がする。そのうち、キーキー、シャツ、シャツと鳥たちが朝のあいさつを始める。その華やかなひびきにこちらも大歓声をあげた。すばらしい交響曲であった。そのすばらしい音楽会が始まるのが楽しみで夜は眠れないということになったものだ。

現在、独立しているあの「みみだけど」の電話の息子が、私のことを「少しベートーヴェンになつていなかな」と言う。電話に出るのがおそいとかレイゾウコが鳴っているよとか言う。そうかしら……と思う。私の年齢の頃の母を憶い返すと、そう、あやしいかもしない。ベートーヴェンは聞こえない耳で指揮をしたと伝説になつてゐる。彼には自分の曲がしつかり聴こえていたのだと思つて私は胸が熱くなる。

いつか私の耳に現実の音が遠いものになつたら、そうしたら、いつでも私の聞きたいと思うメロディーやハーモニーが聞こえてくるだろうと思ひめぐらす。私の弾くピアノの音も、きっと私の憧れるすてきな音で思いどおりの演奏で聞こえるのだろう。

(ピアノ教師)



「きのこ」と「わかる」と

吉川 はる奈

ある大学一年生の春の授業で、高校時代に保育園、幼稚園での保育体験学習に参加した学生に、

と思うのだが、学生にとつては子どもに出会う貴重な機会になつていて。

そのときの感想を書いてもらつた。現在、高等学校の家庭科の中で、子どもの発達ができるだけ具体的に理解させるために、実際の保育現場で子どもに触れるという体験学習が実施されるようになつてきていて。園の先生方の多大な協力なしには実現できないことで、現場の負担は想像以上だ

高校を卒業したばかりの彼らの記述を読んでいくと、実際にさまざまな思いで保育の場に身をおいたことが伝わってくる。一部を紹介したい。

◇A男 「子どもたちのほうから積極的に接してくれてとても楽しかった。二歳くらいの男の子が

僕になじんでくれて一緒に本をよみました。その子はちゃんと言葉をしゃべれませんが、僕としっかりコミュニケーションはとれていました。

(略)

・・・彼は二歳の子どもと一緒に本を読むのを楽しんだという。「二歳の子どもが話すことばのなかには、「あれ?」と思つたり、こちらの読む内容がわからぬのかなと思うこともあつたのだ」というが、気持ちの上で通じないということがなかつたという。

高校時代の保育体験学習の中で、子どもの生き生きとした生活の場に初めて参加してみて楽しめたのがきっかけで、保育者を目指している学生もいる。

◇B子 「子どもは元気だなと思いました。三日間テンションを保つので精一杯でした。子どもは

何を考えているのかわからない、会話にならないし……。圧倒されました。(略)

・・・彼女は、子どもと会話にならない、何を考えているかわからないと随分ショックだったという。「自分のエネルギーではついていけず」、とにかく「テンションをあげた」と表現した。

「先生たちのエネルギーはすごいと思った」とのこと。「私にはとても保育者はできないなあ」と結んだ。

◇C子 「いろいろな子どもがいました。どう接してよいかわからず、ただじやれているようになつてしましました。(略)



・・・いろいろな子どもたちと遊んで、子どもによつてこんなに違うのかとびっくりしたといふ。ひとりひとりにどのように接したらよいか困つて、彼女は「じやれているように」遊んだのだといふ。

◇D男 「何を言つてゐるのかわからず、戸惑いました（略）」

・・・三歳の子どもたちの会話にはいつたのだけれど、何をいつているのかわからなかつた、といふ。自分のほうが子どもたちより年齢が高いのだから、子どもの話す内容は当然わかるつもりでいたので、戸惑つたとのこと。話の中身がどんどん変化していく。わからないままにどんどん変わつていくので、困つたのだといふ。

このように子どもたちからあふれるたくさんの

ことばを耳で「きいて」、「わからない」と戸惑う学生。音に頼つて「話す内容がわからない」、「何を考えているかわからない」から、とにかくテンションをあげて過ごした学生、「ただじやれていだ」という学生。

これでは「楽しさ」を感じにくいだろう。ここに、彼らの人間関係の苦手な様相が透けてみえるような気がしてならない。もちろん、「わからない」中に「楽しさ」を感じてくる学生もいる。

保育所体験学習をより意味のあるものにするためにも、そして何より園にいる子どもたちにとつても、そして何より園にいる子どもたちにとつてすべきな機会となるためにも、彼らに対する多方面からの準備教育と補いが必要だとあらためて思った。そして、子どものことばを「きく」際に、子どもの姿、生活全体から理解し「わかる」ことを、学生たちに具体的に、丁寧に伝えていくことが必要だと思った。

（埼玉大学）

「耳みみ」をめぐつて

村石 理恵子

王様の耳は口バの耳!?

日々の保育の中には、感動することがいろいろあります。自分の見たことや感じたことを誰かに伝えたい、と思うような感動です。「縄跳びを毎日練習していたAちゃんが今日跳べるようになつ

た」「Bちゃんは、悲しんでいる友達のためにそばでじつと待つて話を聞いてあげていた」「CくんとDくんが気持ちを出し合つて、けんかを見たけど、すつきりと仲直りした」。このような姿を見ると、「そうそう、いいぞ!」と保育の中で直接その子達に私の気持ちを表すだけでなく、誰かと

感動を分かち合いたいと思います。その第一の対象は、一緒に保育をしている同僚です。「聞いて！ こんなことがあったの！」という私の発言を聞いてくれる同僚がいることは、嬉しいことです。話を聞いて「それはすごいね」と、一緒に感動してくれると、子どもたちの成長を一層強く感じられます。

また、子どもの姿に感動したことだけではなく、援助や環境の構成のしかたを失敗することも多い私にとっては、その失敗を聞いてもらうこともあります。「そういうこともあるよね」の一言で肩の力が抜けたり、「私なら、こうしたけど」という次回に向けての解決のヒントを得たりすることが多くあります。しかし、失敗を言いたくなくて、飲み込んでしまうこともあります。穴を掘つて、一人で叫んで土をかぶせててしまいたい、とう気分です。それがバネになればいいのですが、

一人で暗い気分になり、落ち込みを更に助長してしまうこともあります。「しまった……」と思うことのうち、同僚に伝える方が自分にとつても相手にとつても、失敗を生かしていくのによい場合は、むしろ積極的に話した方がいいと思われます。恥ずかしいエピソードも多く抱えながら、保育について感じたことを表すことが、必要なだなあと思っています。

耳をすます

ある年、難聴の子どもの担任になりました。彼女は、聞こえにくさを補聴器でカバーしながら、周囲に感性のアンテナを張り巡らしていました。やろうと思ったことに自分が突き進んでいく力をもっていました。その力に感嘆しながら、私は担任としてどんなことをしていいたらいいか……、始めは本当に手探りでした。

そこでまず、気づかされたのは、私自身の言葉への依存です。例えば「次に手紙を取りに来て、もらつたらかばんにしまつて座りましょう」といつた指示的なことや、「さつき、EちゃんとF

ちやんが喧嘩したのはこういう理由だったの」という説明的なこと、「今泣いているGくんは、こんな気持ちだつて」という感情の姿への共感など、あれもこれも、私が流れていく言葉にいかに頼っていたのか、ということです。思い知られた、というべきでしようか。彼女の「今何を言つたの?」という眼差しに何度も「ごめんなさい」をしました。

失敗の経験と同僚のアドバイスによつて、まづ、目を見て話す状況であることを示してから話し始める、口元をはつきりと見せる、ということから改善を始めました。そして、教師として何を伝えたいと思っているのか、それを明確にする、

ということの重要性に気づかされました。ポイントをもつて伝えたいことを効果的に表現する、ということです。仕草や表情、絵に表した表示などが、多くの情報を伝えるということです。そういった自覚や工夫は、彼女のためにだけではありますせんでした。

日々を過ごしながら感じたのは、一人にわかつてもらいたいという気持ちが、他の子どもたちにも伝わるということです。本当に伝えたいことを真剣に相手に向かつて伝えればちゃんと伝わる、伝え合いたい関係ができるてくる、そういうことがを感じることができました。耳をすませば、他のアンテナの感度も上がつていくようでした。そし



て触れあつた気持ちがそこに確かにあつた、と実感することができました。

トントン、何の音？

あぶくたつたは、わらべうたのもつ素朴なやりとりが含まれていて、楽しい鬼遊びです。三歳児

と一緒にやるとき、「トントン、何の音？」
「風の音」「あー、よかったです」のやりとり、繰り返しが楽しくて、その部分ではわくわくした表情や次は何？と耳をすます姿が表れます。「風の音」

「雨の音」「雷の音」といった自然現象を盛り込む中で、子どもたちが気に入つたのは「花が咲く音」です。子どもたちが鬼になると、決まって出てくるフレーズとなりました。「花が咲く音って、どんな音かな？」と聞くと、手の平を広げ「バツ」、人差し指を縮めてからゆづくりと「ぼ」、腕まで大きく広げて「バツ」など、その

子なりの音が仕草や表情と共に返つてきました。その子なりのその開花の音に耳を傾ければ、その花独自の美しさが伝わつてくるようです。どの花も咲くことの喜びが伝わってきます。ああ、なんて素敵なんだろうとこちらも笑顔になりました。

「耳」をめぐつて考えると、以上のような「みつづ」のことを思いました。日々の小さな音にも耳を澄まし、子どもたちと共に感動を味わつていきたいと改めて思いました。

(東京学芸大学教育学部附属幼稚園小金井園舎)

言葉をつかむ 気持ちをつかむ 聴き取る力

山梨 八重子

「話し上手」「聞き上手」と言う言葉があります。

コミュニケーションでは、「話し上手」と「聞き上手」の両方が大切。言葉にそれぞれが思いを込める、その気持ちを伝え共感し合いたいと語り、聴き合うことが大切だからでしょう。しかし中学生を見ていると、なかなか相手の言葉に心を傾け、

気持ちを重ねて聞き取ることはできず、誤解やトラブルを生じているように思います。

心地よいコミュニケーションは聞くことと話すことのバランスが大切です。今の子どもたちはどちらかといえば「話す」方に傾きすぎているように思います。言葉をつかみ、そこに込められた気

持ちや、心をつかみ、聴き取る力こそ、「聞き上手」の本質かもしません。「聞き上手」の力を育てる上で、「読み聴かせ」はとても大切なのはないか、子どもたちを見ていて思います。そんなことをつくづく感じたのは、生徒たちを引率し一緒にバスでの移動中のことです。

バスの中では、バスガイドさんがいろいろな話をします。しかし生徒たちは友だちとのおしゃべりに夢中で、全くと言っていいほど聞こうとしません。教員だけが聞いている状況が続きました。注意しても聴かない生徒たち。結局ガイドさんに必要最小限のお話を願いし、後は生徒たちに任せるように切り替えていかざるを得ない状況でした。確かにストレスは減りましたが、それでよいのかと感じたのも事実です。人の話を聞くというコミュニケーションの基本は、それほど難しいこ

とであるとは思いません。しかし聴くという行為の楽しい体験が少ない人にとっては、苦痛を伴うものなのかもしれないと生徒たちを見ていて感じました。私が人の話しを聴くことに苦痛でなく楽しいことを感じるのは、私の「聴く」体験があつたからかも知れません。

私が小さい頃、親は忙しく読み聴かせなど子どもにかまつている暇もないほどでした。そんな状況で出会ったのが、ラジオから流れる「お話出でこい！出でこい！出でこい！」。この音楽にのって、いろいろなお話が聴けるラジオ番組。幼稚園の年長から小学校一年の時、幼稚園や学校を休みがちだった私は、家でラジオから流れてくるこの番組を毎日聴いていました。他の家にテレビがはいっても、我が家はしばらくの間ラジオ時代が続きました。また下宿生活をした学生時代もテ

レビはなく、もっぱらラジオでした。修学旅行の
引率で東北遠野の昔話の実演を聴いた時、幼かつ
た頃ラジオで聴いたあのお話の時間が戻ってきた
ようを感じ、その世界に包まれていくようでした。

学生時代に楽しみに聴いたのは、日曜日の夜九
時過ぎ、「日曜名作劇場」。森繁久弥と加藤道子、
出演者はこの二人だけ。お一人がいろいろな声色
で、登場人物を演じるのです。二人の声に思いを
広げじつと聞き入りお話の世界に浸る、實に幸せ
なひとときでした。この番組はこの一月に相方の
加藤道子さんが亡くなられて、幕はおりました。

もう一つ好きな番組は「私の本棚」という朗読
番組です。非常勤で少し昼間時間がもてた時、仕
事の手を止めて聴いていました。仕事の都合でど
うしても聞けない時、聞き損ねた時、朗読を待て
ない時、図書館に走つたこともありました。

音の世界に心を遊ばせるという珠玉のひとと
き。何とも穏やかな心になれるように思います。
朗読を聞くことで、育てられた力があると思うよ



特集〈耳〉

うになりました。それは集中力と想像力、そして創造力です。「聴く」ことだけに集中することで、想像することに専念することができるのです。朗読という音の世界は、一瞬一瞬で消えていくてしまるもの。だから一瞬たりとも気が抜けず、故に集中力も求められるのでしょう。私が想像し描いた人物像や風景は、他の人とは違うものです。それはまさに創造力です。そこでは個性をもはぐくむことができたと思います。じつと聞き入り、自分がイメージをふくらまし、自分の解釈でその世界で生きている「時空間」、それが朗読を聞く魅力です。

これほど様々なメディアがなかつた時代、また文字を読めなかつた時代、多くの人々は昔話の語りやお年寄りや親の昔話に耳を傾け、いろいろな情報や教えを得てきました。私たちは、「人の話

を聴く時は静かに聴きなさい」と、耳にたこができるほど言われしつけられてきた世代です。そこで語られた話は、自分の知らない世界との出会いであり楽しい体験だったと思います。卒業を控えた子どもたちに、授業で安野光雅氏の絵本を「読み聞かせ」した時のことです。じつと聞き入る様子に驚き、感動さえ覚えました。この子たちも「聞き上手」の素質はあると。語りを聞くことの楽しさを体験できる機会をもつと与えて、「聞き上手」を増やしていくば、もっとすてきな人とのつながりが創り出されるのではないでしようか。ちょっと希望が見えたひとときでした。

(お茶の水女子大学附属中学校)

「遊び雑感」その六

水はともだち

吉村 真理子

梅雨があると待ち構えていたように太陽がじりじりと照りつけ、べつとり汗をかいた子どもたちは水辺に群がつてくる。夏の遊びの主役は何といつても水遊びに勝るものはない。庭に水道の蛇口があればそこからいくとおりもの遊びが生まれる。

保育所では水道の蛇口に異常な興味を示すのは一歳児で、ちょっと目を離すとコックを開け、その下でうれしそうにバチャバチャと水をはねかえして全身びしょぬれになつてゐる。「もうこれで三度目の着替えよ」と嘆く保育者を尻目に、着替えさせてもらうとまたいそいそと水道のところへ

逆戻り。水の魅力は格別とみえ全く飽きる様子はない。

ているのか、子どもの遊びを通して考えてみたい。

感覚の喜び

昔から、子どもの成長に必要なものは太陽と土と水だと言われてきたのは、他の植物や動物と同じように子どもも自然の一部ととらえていたからであろう。この三つが完備した環境とは、フレーベルが提唱したように自然豊かな庭園のイメージで、樹木と草花と芝生（草原）と駆け回れる土の広場や砂場、小さな池や小川があればいうことはない。子どもはそこから多くの発見、感動、喜びを貰いながら健康でよく動く身体と、たくさんの方達を手に入れる事ができる。

そういう場所は現実には望めないにしても、そんな理想を描きながら子どもにとつての水遊びの意味をとらえ直してみてはどうだろうか。水遊びは単にプールで泳げるための前段階としてではなく、水と関わることによって何を感じ何を体験し

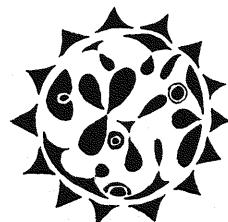
気温が高くなると水に触れたがるのは水が冷たくなり快く感じるからであろう。ほてった顔や手を水に浸すと体温が下がり生き返ったように涼しくなる。気持ちがいいから水の側を離れようとしない。コックの調節で蛇口から流れる水が細くなったり太くなったり、勢いよく流し台から跳ね返ったりするのを手のひらで確かめながら実験してみる。ごく幼い子どもは蛇口から真っすぐ落ちてくる水の柱をつかまえようと何度も試みては失敗する。そのうち、飛び散る水の様子をおもしろがり蛇口に手を押し当てて四方に水を跳ね飛ばす。絵の具や泥が手につくと手を洗いにくいのは、水がいろいろな汚れを洗い流す性質をもつていて



ことを遊びながら知ったにちがいない。絵の具を溶いたカップを洗うために蛇口の下に置き、水が溢れてカップから緑色が流れ出して排水口に消えていくのを見ながら「あつ、緑が逃げていく」と叫んだMちゃんは、カップの中の緑色がどんどん流れ出し透明になつていくのを「逃げていく」と見たのである。おもしろい表現だと思う。

水に溶けるものと溶けないもの

水がいろいろなものを溶かすことに気づいた子どもがやり始めるのが色水遊びで、水に入れて揉み出すとどんな色になるかという実験が始まる。しばらく朝顔の花がらは「取つてもいいわよ」とお許しが出ているのでせつせと集めてくる。一番人気は赤と紫で、薄い青や白、薄茶色の花では鮮やかな色が出ないことも気づいてくる。赤紫の汁は「ぶどうジュースみたい」「メロンジュース



も作ろう」と朝顔の葉を揉むとどろどろした濃い緑になり「青汁になつた」とおもしろがつている。

そうなると次に思いつ

くのはジュース屋さんで、メニューを増やすための工夫が始まる。レモンジュースを作ろうと黄色の花を探し歩いてカンナやまつばほたんの花で試してみるとレモン色にはならず「どうしてかなあ」と首をかしげる。そこへだれかが足洗い場に溜まつた泥水を汲んできて「コーヒーはいりませんか」と得意そうに言う。「ミルクは何でつくる?」「チョークをけずつてみようか」。ところが、せつかくのいいアイディアもチョークの粉は水の上に浮くだけで混ざらない。水に溶けないものもあることがわかったのも学習の一つである。

レモンジュースにこだわっていたA子が黄色の折り紙を探して来て水に入れると鮮やかな黄色がにじみだし「ほら、レモンジュースができたよ」とうつとり。「じゃ、メロンジュースだって」と黄緑の折り紙を絞り始める。「オレンジジュースも」と色紙を使うことを覚えた子どもたちは俄然活気づいてきた。見ていた保育者たちは「これつて安易すぎないかしら」「花以外のものを使うこと?」「そう、だって色紙だつたらそのものずばりの色になるわけでしょ。工夫の余地が全然ないじゃない」「植物の他にも色ができるものを発見したと思えば?」「草木染めと化学染料の違いみたいなものね」「でもやっぱり自然のもので色水遊びをしてほしいわ」と、ちょっと複雑な気分になる。

色を出す実験はその後も続き、包装紙、つや紙、セロハン紙、金銀紙などは色水作りに向かな

いこともわかつてきた。布切れや毛糸、果てはクレヨンまで試していたがほとんど色が出ないので再び興味は草花に戻っていた。やはり、この花からはどんな色が出るかなと期待をもつて揉み出すのが一番おもしろい遊びになるのだろう。

子どもたちは朝顔の花がらをぬらして紙に絵や文字が書けることも発見し、時にはハンカチやTシャツに被害がおよぶこともあります。あわてた保育者が染め物遊びを提案する。和紙の折り染めや古くなつたTシャツを集めて絞り染めにしてファッショントシヨーを開いたりする。折り染めや絞り染めのおもしろさは、乾かして広げたときにどんな図柄が現れるかという楽しみである。

浮くものと沈むもの

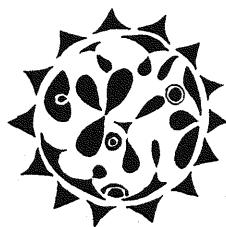
チョークの粉や削ったクレヨンが水に浮いたことから、次に興味をもつたのは“浮くもの”と

「沈む」ものを前もって当てる遊びであった。水を張つたたらいに「積み木は?」「浮くと思うよ」「じゃ、この大きい積み木は?」「うーん、沈むかな」「あ、浮いた、こんなに大きいのに」などと子ども同士でクイズを出し合つて楽しんでいる。プラスチックや金属のおもちゃや道具を片端から試すので材料にはこと欠かない。「運動靴は始めは浮いてるけど水が入ると沈んじゃつた」と、とんでもない実験をする子もいる。

やがて、船づくりが始まり空き箱にマストや煙突をつけたもの、広告紙で折ったボートなどでビニールプールは大にぎわい。手で波を起こして進

めようとみんなが四方八方から水をかきまわすので衝突、浸水、沈没してしまう船もあり、紙のボートは折り目が開いて一枚の紙になつて漂つている。

キヤラメルの包み紙やクレヨンをぬつた紙で船



を折つて浮かべると水をはじいて沈まないことを伝えてやると、早速試して「本當だ、ぬれてないよ」と水から引き上げて底に触つてみる。これら遊びはいわゆる理科の実験のようなものだが子どもにとつてはとても興味のある遊びのようだ。小・中学生の理科ばなれなどどうして起きるのか不思議なくらいである。

水を加えるとのものの性質が変わる

雨が上がると庭にできる水たまりは格好の遊び場所になる。小さい子は長靴でバシャバシャ足踏みするのがうれしくてたまらない。はだしになつてぬめつとした泥の感触を楽しむ子もいる。大きい子は水たまりと水たまりを運河で結んで水を通

したり、ブランコの下にできた水たまりから排水

料理するとは水と火を用いること

口へと川を掘り、せつせと水捌け工事にいそしんでいる。だんだん深く掘り進まないと水が流れないことも体験する。そのうち、川の両側にべとべとの土を固めて土手のように盛り、護岸工事に発展していく。土木工事は雨上がりの最大の楽しみとなる。

水がすっかり引いてしまうと土手の泥でおだんごづくりが始まる。丸めやすい堅さになるよう土と水の交ぜ具合を調節し、乾いた土と砂をまぶして磨きあげ、ピカピカのおだんごになるよう根気よく取り組む。おそらく全国の子どもたちが泥だんごづくりに情熱をもやすのは余程魅力があるにちがいない。

砂場にも水はつきもので、形抜きプリンやケーキづくりから、池、川、トンネル、ダム工事まで水を抜きにしては考えられない。

もうひとつのお楽しみは食べ物つくりである。団子をつくる時のように、小麦粉、白玉粉などの澱粉に水を加え加熱すると、パン、クッキー、ホットケーキ、うどん、お好み焼き、お月見団子などがつくれることも体験させてやりたい（近頃では衛生指導の観点から食べ物つくりを禁止されるところもあると聞くが、加熱すればさほど問題はないのではと残念な気もする）。

クッキーの粉を練りながら「耳たぶってこのくらいの堅さ?」「べとべとして手にくつついちゃうよ」「お粉をまぶしたら大丈夫」「ホットケーキはボタボタと落ちるくらいがいいんだよ」などと水の量を加減するこつも覚える。うどんやお団子は茹でる、蒸す。パンやクッキーは焼くという調理の違いもつくつてみればよくわかる。食べ物つ

くりの工程に自分が関わりながら目の前で出来上がりを待つのはわくわくする楽しみだ。パンやクッキーの焼ける匂い、ご飯が炊けた匂い、うどんのスープの匂いが食欲を刺激する。こんなに感覚を鋭敏に働かせ気持ちを動かせる教材は他には見られないのではないか。

水はどこから

水道のコックをひねれば水が出る便利な生活に慣れている子どもに、生活に欠かすことのできない水のもとは雨であり、川や池をつくり、やがて

辺の様子を含めて描かれている。子どもたちは高い山の雪が解けて川になりダムや発電所、送電線の鉄塔がたっているのを見て、電気も水からつくることを知つて驚く。

私たちが喉が乾いたら水を飲みたくなるように、雨が樹木や草花を育て、お米や野菜、果物を実らせ、身近な鳥や昆虫、魚なども水がなければ生きられないことをそれとなく伝えておくこと

も、地球環境を守るために必要なことではなかろうか。

(元松山東雲短期大学)

☆この連載は今回で終了します。

海に流れ入り、海水が蒸発して雲になり雨を降らせるという循環も年長児には知らせてやりたいと思う。幸い、子どもが興味をもちそうな絵本が幾つも出版されているので探してみてはどうか。一

例をあげると、『かわ』(加古里子、文・絵 福音館書店)には川の誕生から海までの川の一生を周

退職園長による子育て塾(4)

自分を表現できる」と

戎 喜久恵

しゃぼんだま

今までしたことのない、大きなしゃぼん玉つく
り。

はじめは、うまくできなくて、悔しがっていたけ
れど、一度、ふわっと大きな丸いしゃぼん玉が浮か
んでからというもの、とりこになってしまったよう
がうれしそうでした。

です。

「天までとどけ」

いつの間にか、風を感じ、今ならいけるという瞬
間や、ゆっくりと手を擧げるタイミングをつかんで
いるのがわかりました。

自分の手から、不思議な生き物が誕生していくの

キラキラと、ゆれて、流れ……、生まれる。

でも、すぐに消えてしまう。

それを見届けると、また、がんばる。

人工的な遊びかと思つていだけれど、自然の中で、よりはかない自然を感じ、不思議な時間を過ごしました。

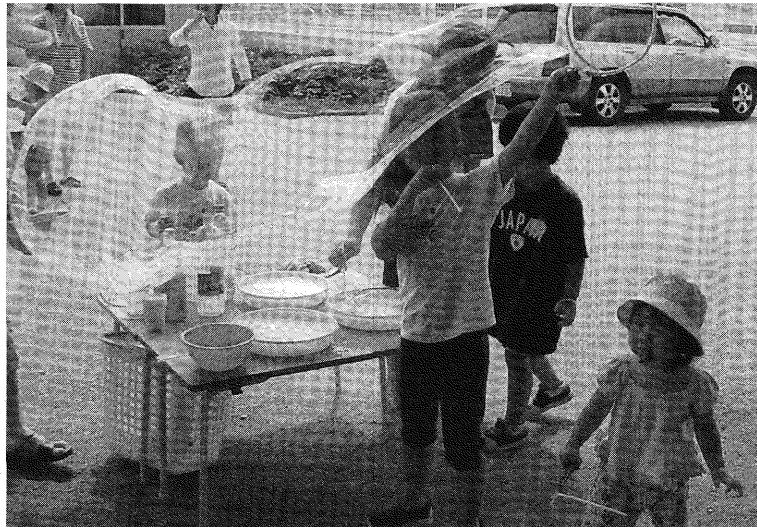
『レインボーブーム』より（tママ）

ずっと以前は石けんを削つて水またはお湯で溶かして、黒砂糖や松ヤニを入れて色や強度を工夫してストローで吹いてつくっていたしやぼん玉も、時代とともに液体洗剤を使うと簡単に作れるようになりました。しかし、しゃぼん玉遊びをする子どもたちを見ていると、はじめは簡単に作れることを喜びやつてみますが、吹く要領をつかみ簡単に作れるようになると興味を示さなくなることが多いようです。吹く用具を工夫して用意してみても一応やってみると終わってしまいます。子どもたちは

石けんを削つて水にとかししゃぼん玉の液作りに精を出すようになります。時々試しては、せつせと石けんを削ります。子どもたちは時間を惜しみません。時間をかけても自分でつくり出すことが楽しいようです。「やつたあ」と成功するまでの時間に意味を見いだしているのでしょうか。

その過程で仲間と触れ合い、互いに情報をやりとりし、認め合ったり、共感し合ったり、それが楽しくてしようがないという様子です。ついつい大人は「しゃぼん玉は飛ばさないの?」と言つてしまいそうになります。先を急ぐ大人と今を充実して楽しむ子どもとのズレを感じる時です。

今回は大きなしゃぼん玉作りにも挑戦してみました。最近インターネットでもたくさんの情報が提供されていますが、台所用洗剤と水にP・V・A（合成洗剤糊）とグリセリンを加えます。表面張力が強化されのがよくなるようです。



▲大きなしゃばん玉作りに挑戦

小さい子どもとするときは、液はあらかじめ作つておき、用具づくりは親子でします。針金ハンガーを使い直径二十センチメートル以上の円を作ります。それに毛糸や布を巻き付けて液を含みやすくします。できあがった用具には「きちょうめん」「ついねい」「あわてんぼ」などその子らしさやその親らしさが現れていて楽しめます。

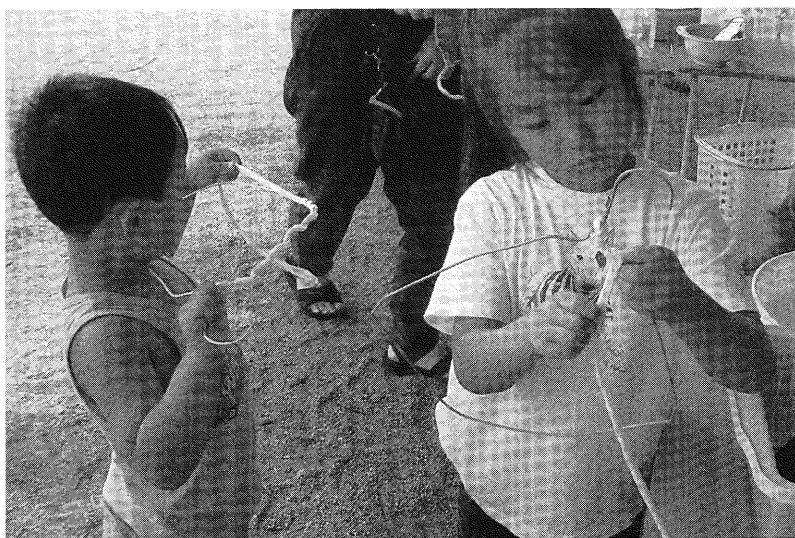
針金で作った円が入る大きめのトレーに液を用意し、針金の円に膜が出来るようにそつと持ち上げて、腕を動かすと大きなしゃばん玉が生まれます。少し風があると最適です。まず、針金に膜を張らせて持ち上げること、それが出来ると後は空気をどう含ませるかでいろいろな形のしゃばん玉が生まれ、最後に丸くなり空中に浮かびます。比較的長時間保ちますから高く、遠く飛んでいきます。また、毎回成功するとは限りません。一回一回違った結果を生み出すのが楽しいようです。小さい子はお母さんに

作つてもらつて喜んだり追っかけたりですが三歳児になると自分で挑戦しています。液を飲んだり目に入れたりしないように配慮がりますが親子で試行して楽しめます。

最近市販のものもあり使ってみましたが、自分で作った用具のほうが自分の好きなように作り替えることが出来、いろいろ試して見ることが可能で楽しめます。ここでも「自分で作ったもの」への愛着と誇りが感じられました。ゆつたりとした時間の中で自分の意のままにならないことやものに挑戦し、折り合いをつけていく中でさまざまな自分の力を見いだしているように思えます。

「感動のしやぼん玉」

店頭には電動しやぼん玉製造器まで種類も多々、ついつい手軽に買い与えるのが当たり前になつてゐる昨今、智恵と創意と工夫であんなに面白いしやぼ



▲針金ハンガーに毛糸や布を巻き付け用具作り

ん玉が出来るんだ。そういうえば私が幼い頃は家でママレモン薄めてストローの先切つてみたり針金丸めてみたりして多少の工夫や智恵も使つたし、できは

悪くても自分で作つた満足感は大いに味わつたものだ。我が子は家で……？ 子どもの遊びまでインスタント食品のようになつていることに改めて気づかされた。幼稚園や「にじサタデー」でのせつかくの体験が家庭でインスタントになつたらあかん、と思つた私です。

先生が帰りに液を子どもたちに。我が子がほしがつたときは入れ物もなくて、当然、私は、彼女の意志を無視して、

「いいです。家にあるし」。先生は聞こえぬふりして新品洗剤を移して空き瓶作つて、おまけにメモリ付き（液作り用）のボトルもろともくださいました。一瞬に娘の気持ちを受け止めてくださった対応に自分の小さな心を感じたのでした。私もハンガー

とぼろ布で……。『レインボー通信』より（iママ）

スイカ割り

にじサタデーに参加するようになつてから一度目の夏がやつてきました。

「おや？ 今日は何か作つているぞ」と興味津々で近づくといろんな材料を使って船を造つていました。「これは、楽しそう」と早速手を伸ばす息子ですが発想と理想と現実には大きなずれがあり四苦八苦。みんなはバツクや木をうまく使ってなかなか面白い船を完成させていました。息子と母の共同作品も何とか完成しブールでの航海に成功。

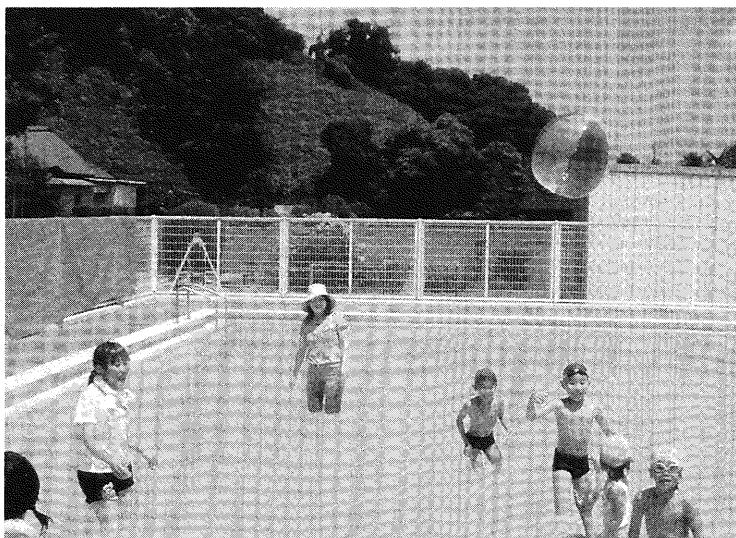
「いいの出来たねえ。これをこうくつけるなんて思いつかないよねえ」などと周りの人たちに褒めてもらつて、はにかみながらの息子の笑顔。得意でないことでもみんなと一緒になら最後までがんばれたね。そしていよいよブール。子どもたちは今年も水

しぶきを上げ元気いっぱいです。「aちゃんは去年は恐々プールに入っていたのに、今年はあんなに楽しそうに余裕たっぷり。大きくなつたね」と目を細めながら言つてくださいました。私の脳裏にまだ二歳前の赤ちゃんみたいな娘の姿がよみがえり、一年も前の子どもの姿を覚えていて成長を見守つてくれています。さつていることへの安心感や感謝の気持ちでいっぱいになりました。恒例のスイカ割りでは、一番に真っ二つに割りうれしくてたまらない息子の満面の笑顔と楽しそうなお兄ちゃんやお友達の姿を、母にしがみついて横目で見てる恥ずかしがり屋の娘の顔がありました。

『レインボーブルーフ』より（いたママ）

七月、八月は、天気さえよければプールに入ります。

泳ぐことよりも水遊びを中心と考えていますの



▲プールで水遊び

で、水深三十～四十センチメートルにし、船を作つて浮かべたり、農家の方に頂いたスイカ割り用のスイカを浮かべたりします（食用は別に用意します）。スイカ割りが始まると子どもたちはやる気満々で言われるまでもなく一列になるから不思議です。「我こそ！」と挑戦しています。「がんばれ！ がんばれ！」の声援に応えようと真剣です。母親にしがみついて様子をうかがっている子も来年は仲間入りをすることでしょう。

「私も」と飛び入りの先生に「がんばるな！ がんばるな！ がんばるな！」のかけ声がかかります。みんな自分が割りたいのです。

言われるまでもなく、思うまでもなく

子どもたちと過ごしていると、どの子もどんな場面でも自分らしく過ごしたいと願つてることが分かれます。大人に言われるまでは大きくなつた自

分が実感できないのでしょう。でも、自分の思うまま気ままに振る舞つているわけではないのです。スイカ割りで前の人にくつついて一列になつて自分の順番を待つ子どもたちも、自分の思いを実現する最善の方法として、自分でない状況の中でとつた行動（らしさ）なのです。自分らしさを受け入れてもらつたとき、子どもの笑顔が輝きます。お母さんたちもこの笑顔に出会つて子育ての喜びを実感しているようです。あわただしい日常の中で、ちょっと心にゆとりがもてたとき、日々大きく成長をしていく我が子に出会えます。この「にじサタデー」が少しでもそんな役を果たせたらと願つています。

（神戸女子大学）

障碍をもつ幼児の保育(23)

ーーこの子と出会ったときーー



津守 真
(F) (M)

遊びが伝えてくれること

電車遊びから水遊びへ

遊びには子どもの心が表現されています。前回は遊びには子どもの心が表現されています。前回は子どもが感じていることを、電車のおもちゃで遊ぶことから考えました。今回は『水の流れで遊ぶ』ことから考えてみようと思います。

よりダイナミックに

F 孫のK男は二歳過ぎになつて、電車で遊ぶことがますます好きになりました。うちに遊びに来たときは、電車はあつても玩具のレールがないので、座敷の畳のへりで電車を走らせたり、障子やガラス戸の敷居の上を走らせていました。木の建具が少し

歪んで隙間ができる所があつて、そこにも入つて行けるんです。トンネルになるんです。

M 私の子どものときも、その頃はプラレールなんてないから、敷居はとてもいい電車のレールでしたね。この子と遊ぶうちに私はそんなことを思い出します。

そんなことをしているうち、K男は縁側から庭に出て遊び始めました。私がホースで水まきをするとき、じきにホースの水まきを手伝い始めて、水の流れに興味をもつてじつと見ていました。水を強く出してほしくて「大きく」というので水栓を大きく開きます。どろんこが手につくのをためらいながら、水の流れが石にぶつかって方向を変えたり、分かれたりするのを見ているんです。

F 流れを見て『別れ道』って言つたのです。そして『行き止まり』『立ち止まり』という言葉も出て、それを聞いて私は何だかはつとさせられました。人

生の旅の大事なことを言い当てるような気がしたんです。

この子、哲学者かしらなんて（笑い）。でも、この子は言葉で表現をするのはじきに少くなつて、靴やズボンの裾を濡らしながら流れの縁を歩きました。

M そうね、たしかに電車で遊ぶのも好きだけれど、水の流れで遊ぶときのほうがダイナミックで子どもらしい勢いがある。

もつと自由に

M 小雨が降つて来たときも、もつとやりたくて仕方ないから大きな大人の赤い帽子をかぶつて遊んだね。

どんどんこ、どんどんこ、どんどんこ
赤い帽子の小坊主が
どんどんこ、どんどんこ、歩いてる

こんな歌をうたいながら歩くと、きやつきやと笑つて私たちと行列をするんです。水の力は大きなもんだね。

F たしかに水の流れの勢いは子どもの心の深いところに働きかけ、枠を取り払つて自由にする力がありますね。

M もっと小さいときは、どろどろ、べたべたがきらいだと思っていた子がそういうことから自由になつてゐるのです。

M 電車が繋がらなかつたり、思うように行かないでかんしゃくを起こす子を見ると、そのときは子どもの体が堅くなっています。水で遊ぶときは体が柔らかくなるのです。

水遊びと身体（子どもが便秘のときに）

考えてみると、愛育学園の子どもたちのなかには毎日水をしないといられない子もいます。水遊びは

実に多様で、語りきれないほどいろんなことがあります。水は流れていることが重要で、流れなくなると、子どもはもつとよく流れるようにしてくれと注文します。水を流しながら、おしつこをしたり、ウンチをすることもあります。流れのイメージは身体の内部にも共通に働いているのでしょうか。

F 水遊びをしていると体が柔らかくなるということは、どんな意味があるのでしょう。

M 体と心は繋がつたものだから、心が不安になつたり、緊張したりすれば、体も堅くなるのでしよう。



愛育学園の子どもの中には、不安が強かつたり緊張していると思われる子もいます。そしてかなりひどい便秘の子もいますが、これを見ると生理的な問題と心の問題とが切り離せないのです。

この間も一人の女の子が怒つてひっくりかえつて泣いていました。何が起こったのかと担任の人にたずねると、この子が外の流しに水を入れようとしているのに、水の出方が細くてなかなか水が溜まらない。それで怒っているとのことです。

そうして水がいっぱいになり溢れると、やつときげんが良くなりました。お母さんも担任の人も、便秘と水の流れと関係があることに気づいていました。

便秘になると水遊びが激しくなる。水遊びをしているうちに体が柔らかくなつて便が出たりします。F うちでも子どもの小さい頃、おふろの中でうんちが出たくなつたりしたのを思い出しますね。

どこから来て、どこへ行く

M 水で遊んでいると、水がどこから来てどこへ流れ行くのか疑問が出てきます。うちの孫も、水が特別に関心があります。どこから来てどこへゆくのかということは人間の根源的な問いでしょう。

F それを求めて地下室にまで探検に行つた子どもことは忘れられません。その年は渴水で、水道の制限があつた夏のこと、どうしても納得出来ない子どもとなぜ水が出ないのか、大人の意地悪じやなく水が出ないという事実を納得するまで時間がかかりました。それ以後私は親たちに「この子たちにとつて水は『心のお薬』だから子どもの水遊びは制限しないで、全自动の洗濯機の水の使用量をみんなで減らそう」と呼びかけました。

M 雨の日にうちの屋根の樋から足元に流れるちょ

ろちよろの水を孫が見て、どこからくるのか不思議がつたとき、屋根の上の、空の上の、『天』からだよと話しました。

保育者的心に流れるもの

F 子どもが水を流して遊ぶとき、自由でダイナミックな想いをもっています。そうすると、どちら遊びはただ楽しいだけでなく、人生の大変なことを学んでいることが良く分かります。二股に水が流れると、『別れ道』であり、水が『行きどまり』になつて行き場を失つているとき、石ころが流れの縁に『立ち止まって』いるとき、成長する子どもにとつてはいつかまた人生の大変な時に出会う出来事だと想うのです。

青年が独り立ちするとき『砂場はぼくの人生の原点』だったと言つたということを聞きました。言葉で表現できない子にとつても、それは同じです。

M こんなことをしていては、普通の子どもといつしょに幼稚園や保育所でやっていけないのでないのかという心配を持つ親もあります。しかしこの子たちにとつて心の中にイメージで蓄えるということがどんなに大切か、お母さんと話しています。

お母さんだけでなく、保育者も常識の枠を取り去つて自由にダイナミックに心の流れを良くしてほしいと思う。

流れないで溜まつてしているときは『行き止まり』の意味を考えつつ、溜まつた水が次第に澄んでくるのをゆっくり待つて、『保育者の思索』をしてほしいと思います。

乳幼児の「食」を考える(2)

小川 清実

はじめに

厚生労働省の雇用均等・児童家庭局母子保健課が担当した「食を通じた子どもの健全育成（－いわゆる「食育」の視点から）」のあり方に関する検討会」が平成十五年六月から平成十六年二月にわたって七回の会議を開催して終了し、報告書が提出された。この報告書は厚生労働省のホームページを通して簡単に読むことができる。

報告書の題は「楽しく食べる子どもに、食からはじめる。報告書の題は「楽しく食べる子どもに、食からはじめる。」

まる健やかガイド」である。

報告書は、子どもの食をめぐる現状と課題を分析した上で、食を通じた子どもの健全育成のねらいが次のように定められた。

「現在をいきいきと生き、かつ生涯にわたって健康で質の高い生活を送る基本としての食を営む力を育てるとともに、それを支援する環境づくりを進めること。」

そして「食を通じた子どもの健全育成」は、子どもが、広がりをもつた「食」に関わりながら成長し、「樂

しく食べる子ども」になつていくことを目指し、具体的には次の五つの子どもの姿を目標とした。

- ・食事のリズムがもてる子ども
- ・食事を味わつて食べる子ども
- ・一緒に食べたい人がいる子ども
- ・食事づくりや準備に関わる子ども
- ・食生活や健康に主体的に関わる子ども

これらの子どもの姿は関連しあつていて、統合した一人の子どもとして成長していくことを目標とするというものである。

ここでの「子ども」とは、乳幼児から思春期までである。

一、「保育所における食事のあり方に 関する研究」について

厚生労働省雇用均等・児童家庭局主催の検討会が実施されていくと同時に、子ども未来財団の児童環境づくり等総合調査研究事業である「保育所における食育の

あり方に関する研究」が酒井

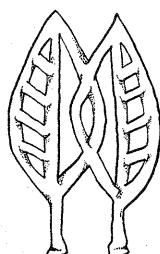
治子（栄養学・山梨県立女子

短期大学）氏を主任研究者として始まり、私がその一員に

なつた。栄養学とは無関係の私が研究班の一人になつた理由は、保育所の食育が栄養学を専門とするメンバーだけではなく、保育学を専門とするメンバーとともに研究を進めていく必要があると主任研究者が考えたからである。そのため、この研究班は栄養学、保育学、心理学、医学の専門を背景にしたメンバーで構成された。

この研究の目的は、子どもの栄養改善と食を通じた心の健全育成のために、保育所における食育の内容、配慮事項、食育の計画作成・評価方法を検討し、保育所保育指針の「食育」版の試案を作成し、保育所における食育の検討をすることである。さらに子育て支援、地域保健活動を進める方法を提案することである。

およそ十ヶ月にわたり研究が実施され、二〇〇四年三月に報告書を提出した。研究を進めていく際、厚生労働省



雇用均等・児童家庭局が主催する検討会と連携をとることが必須であった。というのは、保育所の食育を検討することは、乳幼児期の子どもの食のあり方を検討すること

であり、厚生労働省の「食を通じた子どもの健全育成のあり方にに関する検討会」の乳幼児期と重なるからである。

こうして厚生労働省と連携しながら、保育所において「食」をどのように実践していくべきなのかの研究が始まった。専門が異なるメンバーが、互いに理解し、共通の基盤に立つことに努力し、最終的には厚生労働省の保育課保育専門官である角田氏を交え、『楽しく食べる子どもに～保育所における教育に関する指針～』をまとめることことができた。

二、『楽しく食べる子どもに～保育所における教育の目標

(2) 食べたいもの、好きなものが増える子ども

結論から述べると、保育所にいるすべてのおとなが共に、乳幼児のために「食を営む力」の育成を目指すことを指針の最大の目標とした。園長をはじめ、保育士や栄

養士や調理員、看護師などのおとなたちが全員で、次に掲げる子ども像の実現を目指して行うとした。

① お腹がすくリズムのもてる子ども

このような子どもになるには、子ども自身が「お腹がすいた」という感覚がもてる生活を送れることが必要である。そのためには子どもが十分に遊び、充実した生活が保障されているかどうかが重要である。保育所で一日の生活リズムの基本的な流れを確立し、その流れを子ども自身が感じ、自らそれを推し進める実感を体験する中で、空腹感や食欲を感じ、それを満たす心地よさのリズムを子どもに獲得させたい。

を通じて、いろいろな食べものに親しみ、食べものへの興味や関心を育てることが必要である。子ども自身が、自分が成長しているという自覚と結びつけながら、必要な食べものを食べるという行為を引き出したい。

③一緒に食べたい人がいる子ども

このような子どもになるには、子どもが一人で食べるのではなく、一緒に食べたいと思う親しい人がいる子どもに育つような環境が必要である。

子どもは人とのかかわりの中で人に対する愛情や信頼感が育つことで、食べるときも「人と一緒に食べたい」と思う子どもに育っていくのである。

食事の場面を皆で準備し、皆と一緒に食べ、食事を皆で楽しむなどという集いを形成させたい。

④食事づくり、準備にかかる子ども

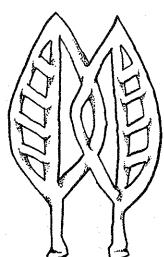
このような子どもになるには、子ども自身が食

事をはじめ、食べる行為を本当に楽しく、待ち望むものであるよう

な体験を積むことが必要である。子どもにとって、食に関する魅力的な活動をどのように環境として用意するのかが課題である。食べるという行為を実感するためには、自分自身が生き続けられるように、食事をつくることと食事の場を準備することとむすびつけることで、食べることは、生きる喜びにつながっていることを自覚させたい。

⑤食べものを話題にする子ども

こののような子どもになるには、食べものを媒介として人と話すことができるような環境が多くあることが望ましい。食べるという行為は、食べものを人間の中に取り入れて、生きる喜びを感じるものである。また、食べるという行為が食材の裁



培などいのちを育む営みとつながっているという事実を子どもたちに体験させ、自分でつくったものを味わい、生きる喜びにつなげたい。

これらの子ども像は個々にあるのではなく、それぞれが互いに影響し合いながら、統合されて一人の子どもとして成長していくことを目指した。

三、具体化に向けて

『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』は、子ども未来財団の研究事業として作成したるものであるが、保育所保育指針が次回、改訂される際にはこの内容を入れ込んで、厚生労働省から出される予定である。子ども未来財団のホームページである「アイ・子育てネット」からも読むことができる。

これまで行われている保育所の保育が基本的に変わらわけではない。食育は、おとなとともに子どもが食べる素材を栽培し、目の前で成長し、収穫した野菜などを、実際に調理するところを見たり、子どもも調理に参加し

たりして、食べるという行為を、日常的に実践することで、食べものに关心を寄せていくことになる。つまり、人が生きていくために必要な、食を営む力の基礎を保育所の生活の中で培っていくとするものである。

現在、家庭では自分たちが食べる野菜の栽培をすることはあまりないだろう。大体の家庭は、購入してきた食材を調理し、食べている。子どもは、食材の完全な姿を見る機会が少なくなっている。『楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～』を作成したのだが、同時に大切なのは、家庭の保護者達が食べることに关心をもち、質の高い生活を送れるようにしていかなければならぬ。保育所に通っている子どもの家庭だけではなく、地域の子育て家庭の保護者への支援も大切であることとはいうまでもない。

(東横学園女子短期大学)

「アーモンド出会い」(8)

「ことばが発達する

岩田 純一

「祝辞」という映画があつた。かなり以前なのでストーリーの詳細は自信ないが、その内容は印象に残るものであつた。係長である主人公（財津一郎）の部下に、その会社の部長の息子がいる。その部下が結婚することになり、部長から結婚式に出席してテーブルス

ピーチを頼まれる。小心で生真面目を絵に描いたような主人公は、まだずいぶん先であるというのに、さつそくスピーチの本やビデオを買ってきては文案を作つて、妻や娘、おばあちゃんたちの前で聞いてもらう。しかし、なかなか気のきいたスピーチにならず悩む

日々が続く。先輩からのアドバイスももらい、ついに家族の者にもOKをもらえるスピーチが完成する。それは、社員旅行の宴席でお酌をしにきた芸者さんが、部長の息子に「いつも好いものばかり食べていらっしゃるけど、どんなものがお口に合うのですか」と聞かれ、新郎が「そんなことありません、じゃがいもの煮軒がしなど好きです」と言うと、その芸者がさつそくそれを作つてもつてきた。それほどうまいとは思えないのに、それを食べて「おいしい、おいしい」と感謝したという、新郎のやさしさや心遣いをさりげなくほめるといった内容である。

いよいよ結婚式当日がやつてきた。主人公は、スピーチ原稿をしつかり握り締めながら緊張して話す順番が来るのを待つてゐる。じぶんの直前に、課長が立つてスピーチを始めた。なんと何と課長は、じぶんが苦労してやつと考えた内容をまるで盗み見たかのようにまったく同じエピソードを話しているではない

か。冗談を交えながらの話術に参会者からも笑い声がきこえる。しかし主人公は頭が真っ白、パニック状態になつてしまふ。いよいよじぶんの順番でありマイクの前に立つが、先を越されて言うべきことばが出てこない。苦悶の表情をうかべてじつと黙つてゐる様子に会場が静まる。主人公は今にも泣き出したいような気持ちで、額の汗をぬぐう。しかし、やはりことばは出でこない。そのとき、親の意に反する職業（芸人）を選び、そのうえまだ一人前ではないのに結婚したいという息子、それに反対するじぶんとの確執を思つてゐる。親としてのじぶんのさまざまな思いと重ねあわせて「今まで育てたご両親にとつてはいろいろな思いがありでしようが、今日の結婚は本当におめでとうございます」と、やつとの思いで搾り出すよつて一言を述べる。首をうなだれながら家に帰つて、「ひょっとしたら会社をやめなきやいけないかもしね」と妻に言い、主人公はじぶんがなさけなくなつ

てくる。そこへ部長から

ことばの発達とは



電話があり、覚悟して電話でないと意外なお礼のことばが返ってきた。

「きょうはほんとうにありがとう、耳あたりのよい美辞麗句はあつたけれども、きみのことばには心をうたれただよ」というものである。

この映画は人の心をうつことばは何かを考えさせてくれる。相手の心に響くことばは難しい。しかし、それはどうも耳あたりのよい饒舌なことばではないようである。なぜ、ことばに詰まつたような主人公の一言が参会者的心をうつたのであるか。それは、その搾り出すような訥々とした表現の中に、親としての思惑からは脱却し、ことばを自由にあやつってペラペラと話せるようになつていくことである。そこでは、ことばにじぶんの切実な思いや感情をいちいち込めていられるようでは、とうていペラペラ話せるようにはならない。また、それでは、とうてい話すのに身がもたない

もともとことばは、じぶんの欲求や思いを何とか伝えたいという切実さを契機として獲得されてくるように思われる。他者に何とか伝えたい懸命の思いが、絞り出すようにことば音声として結晶化してくるのである。そのように考えると、子どもがことばを話し始めるのは、すごいエネルギーのもとにじぶんの思いを凝縮・結晶化させた行為なのである。この懸命さの感覚は、初恋の人にやつとの思いで「好きです」と告白するときにたとえられるかもしれない。

しかし、ことばが発達するというのはそのような状態からは脱却し、ことばを自由にあやつってペラペラと話せるようになつていくことである。そこでは、ことばにじぶんの切実な思いや感情をいちいち込めていられるようでは、とうていペラペラ話せるようにはならない。また、それでは、とうてい話すのに身がもたない

ことになる。

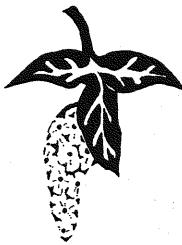
子どもは三歳近くになると、ピンカーが「ダムの決壊期」とも名づけるように、母国語の基本的な文法の急激な習得がみられる。統語ルールにのつとりながらことばの表現を紡ぎだすことがうまくなつてくるのである。それは、じぶんの思いや気持ち（心）とことばの表現との間に距離がとれるようになることでもある。すなわちことばが必ずしもじぶんの心情と分かち難く密着したものではなくなつてくるのである。だからこそ、三～四歳にもなると、しだいに心にもないことを話せるようになるのである。ときにはさもそうであるかのようにことばで嘘をつく、ことばでうわべを取り繕う、ことばでじぶんを誤魔化すこともそうであろう。このようにことばと心が不即不離の関係から解放されてくるからこそ、心にもないことでもペラペラ話せるようになつてくるのである。

少しネガティブなニュアンスに過ぎたかも知れない

が、ことばが心とは別のものとして距離化していくおかげで、ことばをじぶんの心情と切り離して操れるようになったのである。また、知識や概念といった客観的情報を伝え合う道具としてのことばの使用を可能にしたのである。言語の発達とは、最初は切実な気持ちの結晶として結ばれたことばから、しだいにそのような気持ちや思いとは必ずしも結びつかない表現が可能になつていくことであるとも言える。そうであるからこそ、口先でことばを操つてペラペラと饒舌・冗長に話せるようになつてくるのである。それがことばの発達の一画面である。

生活のことば化

ことばと生活という視点からことばの発達をながめてみよう。ことばを話し始めた子どもは、必死にじぶんの思いを音声に込めて片言で話そうとする。そこで、じぶんの思いや心情が何とか伝わるという体験



が、さらに表現としてのことばの獲得を動機づけていくのであろう。このように、三歳頃にはそれまで獲得した語彙や基本的な統語規則によつてじぶんの思いを何とか話すのには困らないほどになつてくる。母親となら長い会話のやりとりもできるようになつてくる。この頃、子どもがじぶんの生活をことばによつて表現する、すなわち生活のことば化がなされ始めるのである。

生活がうまくことば化されるようになると、四～五歳の頃にかけて新たな変化が生じてくるよう思われる。それはことばの過剰化とでも言える現象であり、多弁期ともよばれる言語表現の饒舌化、冗長化がみられ始めるのである。ことばが先走り、ことばが先行するようになつてくるのである。それは、さまざま言語行為となつてみられる。じぶんでお話を作つて語

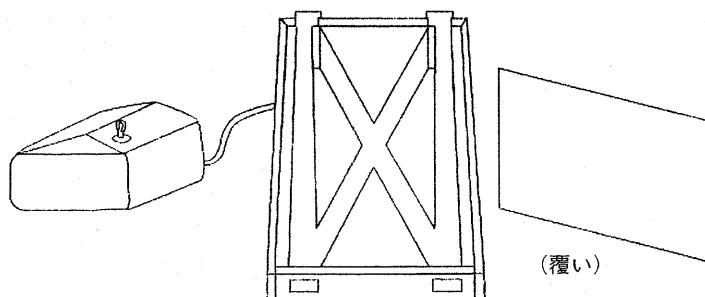
る、想像的にファンタジーを物語るなどといったことも、この過剰になつたことばによつてしだいに可能になつてくるのである。ことばの過剰は、自らの表現の自覺的なメタ化を促していくことにもなる。仲間うちでの駄洒落、無駄口、語呂合わせといった表現や、さかさことば、しりとりといったことば遊びなどが盛んになつてくるのもこの頃である。ことばを遊びの素材とするほどことばが過剰になり、自らのことばがメタ化されてくるのである。これらは、子どもがそれまで以上にことばを自由に操る能力を身につけてくることを示唆している。

ことばによる生活化

このようなことばの過剰によつて、逆にことばが子どもの生活を組み立て、作つていくのに主導的な役割を果たすようになつてくるのである。それは、じぶんの生活をことばによつて表現することから、ことばに

よる生活化が始まるといつてよいだろう。ことばの生活化の始まりは、四歳から五歳児にかけての頃である。その意味で、この頃は一つの重要な転換期であるように思われる。二つほど発達的な研究をみてみよう。

一つ目は、ことばを介して事象のルールを学び、そのルールにしたがつて出来事を予測することができるかどうかをみたブルックスら（二〇〇二）の研究である。図のような傾斜路をもつた装置があり、上方には左右に二つの穴があいている。いずれかの穴からビー玉を入れるとまっすぐに傾斜をころがって下の出口から出てくるか、分路から斜めに横切つて反対方向の出口から出てくるようになっている。斜めにころがるときにはまっすぐに行く回路が閉ざされており、その結果、横に繋がつてあるランプの光がつくようになっている。したがつて、まっすぐに転がるときは、電球が消えていることになる。子どもには、装置の覆いをとつてまずその通路がみえる状況でデモンストレーションがなされる。その際に「光が消えているときは、穴からビー玉をいれたらまっすぐに転がつて出てくる」「光がついているときにビー玉を入れると、斜めに横切つて反対のほうから出てくる」といった規則性を言語的に教えるのである。そのあとで、ふたたび装置を覆つてから、「光がついている（消えている）とき、この穴（左



▲図 ランプにつながった傾斜路の装置



または右）からビー玉を入れたら、どちらから出でてくるか」という予想が求められるのである。その結果、三歳児ではまっすぐに転がつてくるときの予測は正しくできるが、斜めに横切つて出てくるときもまっすぐに出でくると予測してしまう。しかし四歳児になると、両方（光の onないし off）の場合とも教示されたルールにしたがつて球の出てくる場所を正しく予測できるようになるのである。このことは、四歳児になると言語的なルールによる学習が可能になつてくることを示唆している。すなわち、「こういうときはこうする（こうなる）、ああいうときにはああする（あのようになる）」と、教示されたことばにしたがつて生起事象を予測したり、じぶんの行動を組み立てたりすることができるようになつてくるのである。まさに、ことばを主導とした生活の組み立てができる

能になつてることを示唆している。

このようなことばによる生活化は、仲間同士の言語的なやりとりを通して学び合うことを可能にもしていく。ガートンら（一〇〇一）はそのことを示すようなく研究を行つてゐる。彼らは、まず子どもたちが色、形、大きさで変化する十二の積木ブロックを用いて、それらを色、形、大きさ、色と形、色と大きさ、形と大きさといった六つの基準によって可変的に分類することができるかどうかをみてゐる。その成績によつて、子どもは高群と低群に分けられた。そのあと成績群の組み合わせペアが共同で、ミニチュアの家具を人形の家の台所や寝室といった部屋に分類しながら置いていく課題が与えられた。そのあとで、ふたたび最初の分類課題が事後テストとして与えられ、分類課題を共同で取り組んだ経験が、一人で積木分類をするときにはどのような効果を及ぼすかをみたのである。その結果は、四歳も半ばになると、高低ペアの低い成績群で

事前テストから事後テストにかけて積木の分類成績が有意に向ふ上するものがみられた。ちなみに同程度の成績ペアではそのような効果はみられなかつた。そこで、低い成績条件の子どもはペアで取り組んでいるとき、

どのような言語的やりとりをしていたのかが分析された。成績が同程度のペアと比較すると、子どもの発話数はほとんど異ならないが、発話カテゴリーの頻度に一つの特徴がみられた。それは高低ペアにおける低い成績の子どもにチェックング (checking) とよばれる発話が多く出現していたのである。それは「これはどこにおくの」「ここには何がいい」「その他には」といった相手への質問、「きみはどう思う」といった情報の要求、相手と課題について話し合う・議論する、といった発話の内容である。これらは問題解決のためにじぶんがなすべき行為を相手の考え方や知識を借りながらチェックしているのである。それが、やがてじぶんでじぶんの行為をチェックしながら課題を遂行する

手がかりとして内在化していくのである。このようないかで、言語的やりとりを介して、問題解決の仕方を他児から学ぶことが可能になつてくるのである。

ことばによる生活化は、子どもたちの日常的な行動にもみられるようになる。ことばでいじめる、ことばで仲間と交渉する、ことばでかけひきをするといった行動も四～五歳頃から目立つてくる。これらも、過剰となつたことばを手段として、子どもの生活や仲間関係が組み立てられていく様子を示している。

ところで過去の体験エピソードを自伝的な記憶として物語るようになり、それが自己のアイデンティティとなり始めるのは四歳の頃からである。またことばによつてじぶんの行動をプランニングし、その目標に向かつてじぶんの行動を調節していくといつたことも五歳頃にかけてしだいにうまくなつてくる。ヴィゴツキーによると、この頃から、内言機能をもつひとりごとがみられ始め、それが自己の行為を制御・調節し、



思考のための道具として

機能し始めるという。じ

つは、それまでの外言からこのような内言の派生も、外言としてのことばの過剰化がその内言化への道を拓いていくのではないかと思われる。

さいごに

ことばの獲得は、じぶんの思いを懸命に音声として結晶化させる試みから始まる。しかし、統語的なルールの獲得と平行して、しだいにことばは自己増殖的な発達をみせる。それによって、生活がことば化され、さらにことばによる生活化が始まることになつてくるのである。外界の認知、対人的な関係づくり、自己の行動制御などが、ことばによつて主導され、形づくられていくのである。その反面として、ことばが心情から距離化していく。そのような距離化によつて、こと

ばが心情とは関係なく客観的な知識・概念を伝える道具として使われ、心にもないことありもしないことを語（騙）り、また方便としての嘘も可能になつたのである。おとなになるとは、そのようなことばの使い方に習熟していくことである。われわれの日常のことばを考えてみよう。そのことばに、愛の告白のように切実な心情を込めるることはまれであろう。そんな風にことばを使おうとするなら、話すことにすごいエネルギーが必要になり身がもたない。聞く方も同じであり、適当に聞き流す。心から距離をおいて、方便としてことばを使えるからこそ口先でラベラと話すことでもできるのである。話す方も聞く方も、ときのことばに空虚さを感じ、不信感を抱くのは、まさにことばのなかにこの隔たりを感じとるからであろう。

たしかに四、五歳児になると、ことばがしだいに過剰となり、ことばを操れるようになつてくる。しかし、そうはいつても子どものことばは、まだじぶんを

表現したが、じぶんの「こと」を伝えたかった懸命な

思いや気持ちに根柢している。したがって保育者は子どものは「こと」をねとなど同じモノサシで捉えてしまわないように注意しなければならない。求めなければ、

心情に根柢して伝えようとするせいかくの子どもの「ことは」を捉え損ないてしまうことになる。「子どものいじばに耳を澄ます」こと、「ことば」そのような意味で大切なことがある。保育者はまた、子どもへ心を込めた「ことは」子どもの心に届けたいときは使うことが求められるであろう。この頃のそのようないじばの受け渡しが、「ことばにじぶんの思い」を込め、心が込められた他者の「ことば」に共振する力を育み、他方では「ことば」を生活の道具として使う確かな力の育ちにもつながっていいくことになるのではなかろうか。

参考文献

ピンカーネ (Pinker, S) : 棚田直子訳 一九九五 『言語を生み出す本能 (ト)』 日本放送出版協会

Brooks, P.J., Hanaver, J.B. & Frye, D. 2002 Training 3-year-olds in rule-based causal reasoning. British Journal of Developmental Psychology. 19, 573-595.

Garton, A.F., & Pratt, C. 2002 Peer assistance in children's problem solving. British Journal of Developmental Psychology. 19, 307-318.

(京都教育大学)

保育者として…… 育つこと・育てること

矢萩 恭子

若い保育者を育てるという役割、ひいては「保育者の専門性」について考えがめぐるのである。

保育者の専門性について

学生時代以来、言語臨床の相談室、養護学校、聾学
校、そして幼稚園と幼い人たちと関わるいくつかの現
場を経験してきた。さまざまな方々の支えがあつて、
長い間幼い人たちの身近にいられたことの幸せを感じ
ながら、出会い、別ってきた沢山の子どもたちに思い
を馳せる。果たして自分は保育者として成長できただ
ろうかと自問する。そして、ここ数年、痛感してきた

環境としての保育者という側面から見たとき、保育
技術的な面から当人の人間性や人生観に至るまで保育
者の在り方が保育の内容や質を決定づけるという意味

において個々の保育者に課せられる責務は重大である。しかし、"専門性"という点から考えてみると、保育者は保育の場で起きていることについて最大限感知し、個々の子ども・子ども同士の関係・自分と子どもたちとの関係などに纖細で鋭敏な意識を持ちつつ、同時に瞬時の判断から実際に動き関わっていく。この"感じ考え方の動き関わる"というところにこそ極めて専門性の高い保育者としての営みがあると言えるのではないだろうか。

無意識のうちにされている保育行為の価値もこれを否定するものではないが、保育の現場において保育者は極めて高い意識のレベルで子どもたちを捉えていると言える。従つて保育者は、それが子どもにとって必要と判断したならば、自分自身の行動をかなり意識的に抑制したり、反対に保育者の意図を表そうとしてコントロールしたりする。関わっている子どものわずかな変化や成長を逃がさずに捕まえようと努める。そ

して、子ども同士のトラブルや子どもたちの間で起こっていること、遊びの状態、それぞれの気持ちや考え方、関係などについて、自分が捉えた出来事と出来事の点と点をつないで、その出来事の背景や文脈、そのときの状況に思いを至らせ、クラスの子どもたちの姿をさまざまな角度から理解し、把握しようとする。これらはいずれもそつたやすいことではなく、自らの日々の保育を振り返り、そこから次の保育計画を生み出し、再び実践に臨むという一連の保育行為を地道に繰り返す修練を必要とする。今日の保育者は、再び新たな理解と願いをもつて明日の保育者となるのである。子どもたちとの心の通じ合いや成長の喜びを糧にこの不斷の循環性を持ちこたえながら進んでいくところに専門家としての保育者の生活がある。

若い保育者との交わり

幼稚園の現場には、免許状取得を目指す学生たちが

保育の実習に訪れる。短大の一年生、二年生のさまざま
な形態の実習受け入れ先として、これまでに出会つ
た学生の数は相当数になる。入れ替わり立ち代り訪れ
る実習生をその都度克明に記憶していくことは困難な
ので、非常に感覚的な手ごたえということになるが、
実際に子どもたちと会ってみての新鮮度が年々落ち
てきているように思われる。実際の子どもとの衝撃的
(であるはずの) 出会いから実習生が何を感じ、担任
である私と行うその日の保育を振り返る反省会からど
んなことを考えたのか、言葉として返つてくることは
もちろんのこと、表情や意欲としても伝わつてくるこ
とはかなり希少になっている。学生たちが慣れない保
育者としての生活(清掃など早朝からの保育準備、実
際の保育、保育後の掃除、教材の準備を始め保育後の
仕事の手伝い、反省会、そして家に帰れば何時間も要
する日誌の作成など) でかなり疲労困憊することは分
かっているつもりである。何が何だか分からないうち

に実習が終つてしまうのかもしだれないが、挨拶や返事
の仕方、或いは保育中の動き方や姿勢・表情、遊びへ
の参加の仕方や関わり方、雑巾やほうきの使い方な
ど、様々な事項について事細かに手取り足取り同じこ
とを何度も知らせていかないと短い実習期間の中で
は伝えたいことが伝わらないようになつてきている。

一方、歳月の自然な成り行きからまだ経験が浅
いと自認していた自分が先輩について行くだけの保育
者ではいられなくなつてきた。自分がときがおこがま
しいと感じながらも、年度の職員の配置によつては経
験の浅い後輩たちと共にその年齢の保育を実際に進め
ていかねばならない現実が押し寄せてくるようになつ
た。年を追うごとに増す世代の差への意識や、目まぐ
るしく流れていく現場の時間などから、経験の浅い本
人が気づいて意識するまで待つことや相手なりの意図
を見極めるだけの時間的猶予が持てないままに、一方
的に指摘したり、注意したりすることも正直言つて少

なからずあつた。そして後味の悪い違和感が残つた。

違和感を覚えつつも、自分の足元ばかりに視線が行つてあまりにも周りが見えていない様子や、当然質問が出て然るべき事柄に何の反応も示してこないことや、若いはずの彼らが子どもたちが帰ると疲れ切つてしまい、何を感じ考へているのか子どもの様子を話すこともなく寡黙にいること、そんなことばかりが気になつた。

そんなとき、その昔、自分がどのようにして子どもと出会い、現場の先輩方からどのように育てられてきたかを改めて省みることになった。

私の子どもたちとの出会い

ことばらしいことばをほとんど話さず、要求があるときには私の手首を掴んで対象物のところへ置くことで自分の気持ちを伝えてくれたNくん。無表情なまま私の顔を見ずに手首を掴まれることに抵抗を感じ、N

くんが私に対してどんな気持ちを抱いているのかつかめず、それでも何とかNくんの思いを理解したい、少しでもNくんと心を通わせたいと願いながら何ヶ月も同じような関係が続く。そしていつの間にか、指先に伝わるわずかな力の変化やふつと流してくれた視線の楽しげな感触に天にも昇らんばかりの喜びを感じる自分に変わつていった。

にここにことよく笑い、一見社交的なSちゃんとの散歩では果てしなく続く進路決断の迷いと要求されるおんぶに背負うSちゃんの自立と依存との葛藤を支えき



れなくなりそうなときがあつた。こんな自分で良いのか、揺らぐ気持ちを見透かされ座り込んだまま動こうとしないSちゃんに思わず受け止めることを放棄し立ち去りかけて、我が身の狭さを突きつけられまた自己嫌悪に陥るというようなドロドロした現実を経験した。その他、長い時間トランポリンを一緒に飛び続けたり、高い場所や地下鉄やスーパー・マーケット、エレベーターなど公共の場所を好んで目指して行く小さな後ろ姿を追いかけたり、何度も“いないないばあ”のようなかくれんばを繰り返したり、フエンスの網の穴から落ち葉を落としたり、数えきれない真剣な出会いと交わりがあった。今考えるといずれの子どもたちともしっかりと出会い、しっかりと関わられるだけの恵まれた時間と環境があつた。私は先輩からあれこれ指図を受けることもなく、信頼されてその場を任せられ、相手のこと、相手と関わる自分自身のことをじっくりと感じ、見つめることを許されていた。ことばに

なる以前の経験の感触をたっぷりと味わうことが出来た。この点が今の若き保育者と決定的に違っているようと思われてならない。初めて実際の子どもと出会うというそのときに、こなさねばならないことの義務やとてもゆつたりと一人の子どもとの関わりを感じてなどいられない忙しさの中で経験する子どもとの出会いとはどんなものなのだろうか。

現場での保育者同士

機敏な動きとタフな体力を必要不可欠な条件として、現場（幼稚園）の保育者は早朝から子どもたちが帰ったあとも遅くまでその動きを止めない。身体は常に保育者同士の持ち場の分担意識（例えば、誰かが園バスに添乗していれば、残りの者が保育後の掃除を請け負う、一人が園庭の子どもたちを見ていれば、もう一人が保育室やその他の室内を見るといった具合に）から、動きながらも次の仕事を考え、無駄のない素早

い動きを心がける。

保育後は保育後で少なくはない行事や先の保育のために雑多な仕事を次々とこなしていかねばならない。打ち合わせに割かれる時間はどうしても省くことが出来ないので、書類関係の仕事など取り切れなかつた分は不本意にも持ち帰りの仕事となる。肝心のその日の保育を振り返る反省会は電話の応対や別の係りの仕事などによつてしばしば中斷され、保育記録を書くといふ大切な行為もまた持ち帰りとなつてしまふ。

それでも何とか忙しさの中で交わすその日の保育のある場面・ある子どもについての伝え合いは往往にして、母親の在り方への原因追及やその子どもにとっての課題確認に終始しがちで、自分の保育の在り方や方向性を含めた反省を話し合つたり、園全体の保育の構造を見直したり、各自の保育の中身を差し出し合つて本当の意味での保育研究へとつないでいつたりするこにはならない。担任同士ともなると、たとえ保育室

が隣あつていても一旦クラスが集まつてしまふとなかなか相手の保育の具体的な部分は見えないもので、ある種の勇気が必要となつてくるが、個々の担任の保育をオーブンにして互いの保育の質を高め合うためには、担当の年齢を超えた親密な話し合いや担任とは違つた立場の保育者からの話題提供など忙しさに抗した意識的な方向づけが是非必要であろう。

園全体の在り方

ずっと以前、私の勤めていた園に他園の主任の方が保育の巡回指導に来て下さつたときに言われたことばを思い出す。保育経験の豊富なベテランぞろいだた当时、私たちは『職人になるな』と言られたのである。経験が重なり互いの保育の性格も何となく熟知し、自分の保育に足りないものも自分なりに認識していく、ある意味そこに安住していた私たちは互いの保育には触れずにおり、園全体が分かり合つてゐる者同

士のマンネリ化した調和と安定の感を呈していた。そんなどきに、日頃は見せ合わない自分の保育の指導案を出し合い、全員で保育後の話し合いを行つたことは大変新鮮な刺激があつた。その日の保育を振り返つているその場で、自分たちが行つて いる保育を整理したことばで伝えることの重要性を指摘されたのである。

子どもたちの自由な活動、子どもが自ら始めた遊びや友だち関係、日々の生活を尊重し支えながら二年、三年という長いスパンを通して子どもの変化や成長を見通し、保育者の役割を追究していく保育の中身を若い保育者に伝えていくのは難しい。なぜなら、保育は経験が重なれば容易に行えるようになるというようなものではなく何年経つても日々新たな悩みや問題と向き合つていくことになるからである。確かに、経験といふ点で個々の保育技術や活動の引き出しに弱い若い保育者は、どうしても明日の保育のためにこれらをマニュアルとして取り入れがちになる。否が応にも明日

は来て、何らかの実際的な保育内容を展開していくなければならないからである。そこで不可欠なのは、なぜこの機会にこのクラスでこの保育内容をこのようにして行うのかという反省的視点であろう。

ここで再び保育者の専門性という点に話が戻るが、園における然るべき立場の者は、個々の担任の力量や特徴を引き比べて一方を他方よりおとしめ保育に向かう意欲を低下させるのではなく、今日の保育を子ども・保育者の両側面から振り返り、子どもたちの状態を読み取り、明日の保育を計画・立案していく力を蓄えていくことのために園全体が一丸となつて取り組んでいく姿勢をこそ、保育者同士が育て合う職場の環境として用意していくよう願いたい。

現場ほど大変で高度な保育の営みを担つているところはなく、現場の保育者ほど真の保育研究者で在り得る者はないと思われるるのである。

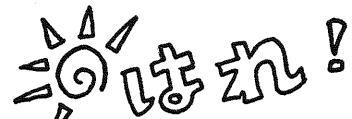
ねがいごと

あれから少しだけ時間が流れ、今思うのは、子どもの
真剣な願いは、必ずや星に届くということ。



とき
どき

さとうひろこ



その④

七夕が近づくと、私たちの幼稚園では、遊戯室に大きな笹を対にして飾る。そこに、子どもたちが家から持ってきていたり、幼稚園で作ったり書いたりした飾りや短冊がつけられると、笹はその重みで頭をさげ、大きくしなる。いつも

の開放的な遊戯室に独特の雰囲気が漂う時だ。

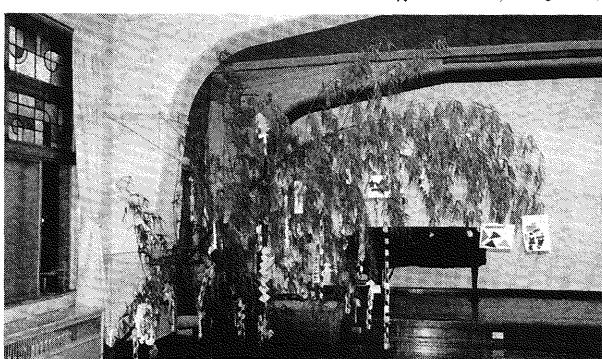
昨年の七夕の前日、

「せんせい、これつけといてね」

と、R子から手渡された短冊には、幼い字で、「パパがはやくげんきになりますように……」

と書かれてあつた。前の年のクリスマスの朝に父親を突然亡くしたR子の叶わぬ願いを、私たち幼稚園の職員は皆、切ない気持ちで受けとめた。

今年の七夕、彼女は何を星に願うのだろう。



(幼稚園勤務)

編集
後記

登園途中で怪我をしてしまい、泣きながら母親と保育室に来たAは「Aちゃんのお星様はどこかしら」の言葉で気分が変わり、朝のしたく

始めました。

Nは自分の飾りが何もないことに気づき、いくつかの飾りを創つて結びつけました。そして翌日には、クラスのみんなの星があることに気づき、声を上げました。

名札替わりとして付けておいたお

星さまがY君くんの好きな色や彼の持つ創り出す力を私に教えてくれたり、Aを勇気づけたり、Nに自分の世界の広がりを感じさせてくれたようでした。

*
枝を持ち帰る七夕の当日、なにも作つていなかつたYが、私に、Kは作るのかどうか尋ねてきました。私は「(きっと) 作るわよ」と答え、Yのお星さまを見に行こうと誘うと、Kと一緒に、筐に飾つてある自分が、気づいていない願いをも、かな二ークな形の飾りを作りました。

『星に願いを』は私が好きな曲ですが、気づいていない願いをも、かなえてくれていたのでした。(河合)

幼児の教育

第一〇三卷 第七号

(一〇〇四年七月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十六年七月一日

編集兼发行人 田代和美

日本幼稚園協会

〒112-8620 東京都文京区大塚二丁目二

お茶の水女子大学附属幼稚園内

図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二

株式会社 フレーベル館

〒113-8111 東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三一五三九五一六八三(営業)

☎〇三一五三九五一六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一二一九六四〇

☆ 本誌の購読のご注文は発売所フレー
ベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中

行事別保育のアイデアシリーズ

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ



やまもとかつひこ 監修／関西あそび工房 著

行事別保育のアイデアシリーズ①

元気がいっぱい

夏期保育

夏は、子どもたちにとって魅力いっぱいの季節。保育者のかわいい方一つで、夏の魅力がどんどんふくらんで、子どもたちの育ちがもっともっと豊かなものになります。

本書は、保育者の発想を広げ、豊かな「夏期保育」を展開していくための「遊びのレシピ集」です。

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)



ワークショッピングの木 著

行事別保育のアイデアシリーズ②

みんなにこにこ

運動会

「ふだんの子どもの遊びを運動会種目につなげたい」「見ている人も楽しめるものにしたい」「いつもの種目をもっともっとおもしろくするためにには」など、保育者と子どもたちの工夫が生かされた運動会の新しいアイデアを多数提供。子どもも保護者もうれしい、新しい運動会のヒント集です。

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)



小林紀子 編著

行事別保育のアイデアシリーズ③

心を伝える

入園式・卒園式

どんな入園式・卒園式が、子どもたちや保護者にとって魅力的なのでしょうか。本書は、さまざまな保育の場で行われている「入園式」「卒園式」にスポットをあてて紹介。独自の「入園式」「卒園式」を工夫するためのヒントとなります。

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)



AB判 96頁
定価 2,310円(税込)

行事別保育のアイデアシリーズ④

みんなでつくろう

発表会

花輪 充 著



AB判 96頁
定価 2,310円(税込)

行事別保育のアイデアシリーズ⑤

みんなわくわく

クリスマス・お正月

島本一男 著

キンダーブックのフレーベル館

21世紀保育ブックス

最新刊

編集委員 森上 史朗(子どもと保育総合研究所代表)
柴崎 正行(大妻女子大学教授)
柏女 霊峰(淑徳大学教授)

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

21世紀保育ブックス⑯

保育をデザインする 保育における「計画」を考える

戸田雅美(東京家政大学)著

「保育の計画」とは、一人ひとりの子どもの思いを実現していくながら、その育ちも保障されていくように、また、子どもと保育者が一緒に創り出す遊びや生活の全体が豊かになるように、保育を「デザイン」していくことです。保育者がどんなふうに考えながら、保育を計画しているのか。そしてそれはどのように表現されているのか、もしくは「デザイン」されているのかについて、さまざまな事例を読み解いていくという方法で考えてていきます。だれもが悩んでいる「保育計画」の考え方・書き方を詳述。保育者必携の書です。

【目次から】

- 第1章 保育はオーダーメイドデザイン
- 第2章 指導案に見る保育のデザイン
- 第3章 環境に見る保育のデザイン
- 第4章 保育における「計画」～種類の違いをどう生かすか～



B6判 144頁 定価1,260円(税込)

既刊本

- | | |
|------------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女靈峰・山本真美 共著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 |
| ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真美・尾木まり 共著 |
| ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ⑩保育者が出会う発達問題 | 大場幸夫・前原 寛 共著 |
| ⑪保護者の要望をどう受けとめるか | 小笠原文孝 著 |
| ⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る | 吉田正幸 著 |
| ⑬子どもの健康を考える | 巷野悟郎 著 |
| ⑭「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ | 今井和子・神長美津子 共著 |
| ⑮21世紀の子育て支援・家庭支援 | 伊志嶺美津子・新澤誠治 共著 |

以下続刊

キンダーブックの フレーベル館